

「瀬戸内町立諸鈍小中学校の諸鈍シバヤ伝承の取組」

1 学校名

瀬戸内町立諸鈍小中学校

2 学年・人数

小学校1年生～中学校3年生 10人 (男子児童生徒のみ)

(小1・2人, 小2・1人, 小5・1人, 小6・1人)

(中2・3人, 中3・2人)

3 日時・場所

(1) 練習の日時・場所

平成26年9月24日(水) 19:30～20:10 (諸鈍公民館)

平成26年9月25日(木) 19:30～20:10 (諸鈍公民館)

平成26年9月26日(金) 19:30～20:10 (諸鈍公民館)

平成26年9月27日(土) 19:30～20:10 (諸鈍公民館)

平成26年9月29日(月) 19:30～20:10 (諸鈍公民館)

平成26年9月30日(火) 19:30～20:10 (諸鈍公民館)

(2) 発表の日時・場所

平成26年10月2日(木) 総合的な学習の時間 (大屯神社)

4 伝承・活用に取り組んでいる郷土芸能, 伝統行事や史跡について

(1) 名称

諸鈍シバヤ(しょどんしばや)

(2) 由来

源平の戦いに敗れた平資盛は、源氏の追討から逃れるために奄美大島に渡ってきたという。資盛は加計呂麻島の諸鈍に移城を築き、薄幸な一生を送った。彼が交流を深めるためにこの土地の人々に教えた演舞が、諸鈍シバヤの始まりといわれている。

(3) 構成等

11の演目で構成され、出演者がすべて男性であり、手製の「紙面(カビディラ)」をかぶっている。服装は頭に陣笠風の紙笠をかぶり、衣服は上に絹の吹き流し、下は股引を身に付ける。しかし「サンバト」とよばれる役だけは、山高帽をかぶり、手には采配を持ち、長くのびた白髭の紙面をつけている。

5 保存会や地域との連携の具体

学校の教育活動（総合的な学習の時間）の中で伝承活動を位置付けている。授業時数の削減と指導者の都合から公民館で夜間練習を行うようにしている。毎回40分程度、諸鈍シバヤ保存会の支援のもと、小学1年生から中学3年生までの男子児童生徒10名が指導を受けている。保存会との連絡調整は、学校の教頭が務めている。夜間練習にもかかわらず、男性教職員のほとんどが参加し、子どもを見守りながら伝承していく体制が整っている。

6 文化財伝承・活用の取組の工夫した点

学校と地域が連携しながら諸鈍シバヤを継承していくために、諸鈍シバヤ保存会が重要な役割を果たしている。この保存会との連絡調整は、学校の教頭が務め、練習方針や計画立案等、円滑に行われている。旧暦の9月9日に実施される大屯祭で踊る「諸鈍シバヤ」は、国の重要無形文化財に指定されているが、後継者育成が大きな課題となっている。

そのため、10年ほど前に参加年齢を小学校1年にまで下げた。低年齢の子どもに指導をすることは難しいが、保存会の方々と教職員による指導で踊れるようになってきている。最近では、保育所でも「ちびっ子シバヤ」を演じるためにシバヤの練習が始まっている。年長者が年少者に踊りを教える体制が整いつつあり、学校でも休み時間に踊りの指導をする中学生の姿が見られる。

なお、取組の様子は、学校だよりやホームページで紹介している。

7 取組の様子



夜間練習の様子



仮面をつけての練習の様子



本番当日の様子1



本番当日の様子2

8 参加児童生徒・保護者・保存会・教員等の感想・意見

- ・ 中学生や保存会の方々に踊りを教えてもらって楽しかった。大人になってもずっと踊りたい。(小学生から)
- ・ 9年間参加することができて、諸鈍の歴史についてよく理解できた。
800年も続く伝統を少しの間だが継承することができてよかった。国の重要無形文化財を演じてみて良い思い出ができた。諸鈍に住んでいるので高校生になっても大人になっても続けていきたい。「りゅうて(演奏者等)」がどんどん減っているのだから、これからどうなるか心配だ。
(中学生から)
- ・ 貴重な国の重要無形文化財「諸鈍シバヤ」を踊ることができて感動した。歴史と伝統のある伝統行事に関われたことで、一生の思い出になる。素晴らしい経験ができたが、練習の回数をもっと増やすと、より一層シバヤに対する地域の気持ちは高まるのではないか。(教職員から)
- ・ 伝統芸能の継承という意味で諸鈍シバヤを続けていくために、子どものうちから踊りを覚えていくことが一番大事である。高校を卒業し、いったん島を離れて諸鈍に戻ってきたときに諸鈍のすばらしさや郷土愛に気付くと思う。今後も学校との連携を図っていきたい。(保存会から)
- ・ 小学校5年生の頃から中学校3年生までシバヤを踊っていた。十数年ぶりに練習に参加したが、すぐ踊れた。歌も口上も覚えていた。やはり子どもの頃の練習が大きいと思う。踊り手はみんな楽しんで参加している。継承の課題としては「りゅうて」が少ない点が挙げられる。今後は後継者の育成をしていきたい。(保護者から)